

夏まき麦類の飼料利用確立試験

名和長圀・畠山澄雄・田村紘吉・東 政則(宮崎県畜産試験場)

NAWA, N., S. HATAKEYAMA, K. TAMURA and M. HIGASHI : Study on Late-Summer Sowing Barley and Oats for Forage

ホールクロップ利用のための夏播き麦類の栽培試験を3年にわたり実施してきたが、今回1980年度に実施した品種選定試験とイタリアンライグラスの混播試験について結果を報告する。品種の選定は収量に主眼を置き、また混播試験は最適草種の組み合わせと単播した場合との得失を検討した。

1. 試験方法

1) 品種選定試験 大麦はカワホナミ、西海皮24号、エン麦はハヤテ、アーリークイーンを用い、a 当り大麦1.0kg, エン麦25000粒を1980年9月5日に条播した。施肥は基肥のみとし、a 当りN 0.9, P₂O₅ 2.1, K₂O 0.7kgを施用した。

2) 麦類とイタリアンライグラスの混播試験 大麦: 西海皮24号, エン麦: ハヤテにイタリアンライグラスのワセユタカ, マンモスAを組合せ, a 当り大麦1.0kg, エン麦20000粒, イタリアンライグラス0.3kgを1980年9月5日に散播した。基肥は1)の品種選定試験と同一としたが、追肥は刈り取り毎にN 0.45, K₂O 0.4kg, /aを施用した。

2. 試験結果と考察

1) 発芽, 生育 発芽, 初期生育はいずれも良好であったが、大麦はエン麦に比べ、発芽がやや早い傾向にあった。播種後50日目頃より出穂期に到ったが、大麦がエ

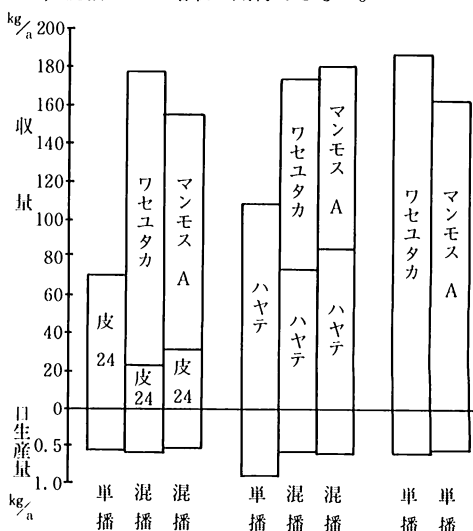
ン麦より早く、とくに西海皮24号が最も早かった。また混播により大麦, エン麦とも出穂期は早まる傾向にあった。倒伏はエン麦単播にのみ起り、アーリークイーンはハヤテより早く、かつ多く倒れた。病害は単播の大麦にハンテン病が認められたが、それ以外は軽微であった。麦類の穂数は単播が混播に比べ多く、とくに西海皮24号は多かった。エン麦単播は倒伏のため穂数が減少した。刈取りは大麦では糊熟期、エン麦は寒により登熟の見込みがなくなった時、イタリアンライグラス単播は初回草丈50cm, 2回目以降草丈70cmを目途とし、麦類は1回, イタリアンライグラスは区により3~5回刈取った。

2) 収量 合計風乾収量はワセユタカ単播が最も多く混播による増収は認められなかった。麦類の単播ではハヤテが最多収を示した。

以上の結果から、夏まき麦類の単播は大麦ではカワホナミ(第1表)、エン麦ではハヤテが適当であり、大麦とエン麦ではエン麦が適当と考えられた。混播はエン麦ではハヤテ・マンモスAが良く、大麦ではイタリアンライグラスを主とすればワセユタカ, 大麦を主とすればマンモスAが適当と思われた。また混播目的を収穫期の移動におけば、エン麦とイタリアンライグラスの混播が、大麦とイタリアンライグラスの混播より望ましい。しかしながら、混播による増収は期待できない。

第1表 生育及び収量

		出穂期 月・日	穂数 本/m	初刈回数 月・日	刈取り 回数	風乾収 量kg/a
単播	カワホナミ	11.10	477	1.7	1	79.3
	西海皮24号	10.28	690	12.25	1	71.3
	ハヤテ	11.17	240	1.19	1	108.1
	アーリークイーン	11.24	107	1.19	1	95.1
混播	ハヤテ・ワセユタカ	11.7	197	1.7	3	174.0
	ハヤテ・マンモスA	11.10	182	1.7	3	180.1
	西海皮24号・ワセユタカ	10.23	328	11.26	4	177.4
	西海皮24号・マンモスA	10.24	449	11.25	3	154.7
	ワセユタカ			10.22	5	186.5
	マンモスA			10.22	4	162.1



第1図 風乾収量